

## 「中国新出土の書・六選」

西林 昭一

皆さんこんにちは、ただいまご紹介に預かりました西林昭一です。大東文化大学の第五期、昭和三十二年の卒業です。よろしくお願ひします。

まず第一番目は、柞伯斝といひます。一番下の文字は斝といひつて青銅器の器の意味です。柞伯斝の「柞」の字は、本来は肉月、月を書くのが正しいのですがこの金文の銘文中に木偏を使つておりますので、器の名前にしております。斝といふのは、鍋、深い鍋型の銅器に、台座がついてゐるものです。台座の形は様々なのですがこの柞伯斝は、ちょうどトランプットの様に広がつたものが高く台座についてゐます。一九九三年、今から十五年ちよつと前に、河南省で出土しました。その器の高さが十六・五cmの鍋で円形です。口の直径が十七cm、それから底へ窄まつておりまして、底の直径が十三・五cmです。この銘文の拓本が図①に示されてゐます。大きさは縦十三cm、横八・五cmというものです。そのとなりに令方彝という器の銘文で、書き出しの部分の部分を載せました。なぜこれを載せたかといひますと、「佳八月辰在甲申」といふ始まり方をする。「申」といふ文字までがほとんど同じなのです。令方彝の書き出しは、これが大変珍しい。この令方彝というのは有名な器でありまして、銘文は百八十七字あります。もう一つこれに似てゐる書風がありまして、それは、大盂鼎です。二百九十一字の長文です。柞伯斝の銘文は図に載つてゐるのが全文で七十四字あります。どういふ内容かと言ひますと、一行目の一番下、二字が「大射」と書かれてゐます。これは、弓を射る儀式のことを指してゐます。セレモニーとして、弓を競うといふことが、「儀礼」といふ書物にでてゐるのですが、「大射」がこのことです。「柞」といふ国の「伯」といふ王子様なのですが、儀式を行うときに、周の王様が「柞」の国へ行つてその儀式を執り行うのですが、自分の臣下を連れて行つて、その儀式をやるうとするときに、王様がふと思いついたのぢやうね。二行目上から二、三字に周王とあり、そうだ柞伯よ！ お前はわしの家来の前で弓を引いてみないか？ もし、的に当てたら、黄金十斤をとらせよう。四行目の一番上の文字に「赤金十反」とあります。これは、金文、甲骨は音が同じであれば、同じ字を使うといふことであります。それでですね、実際にやってみると、十発打つて十発とも的に当たつた。五行目の下二、三字が柞伯といふ字です。

① 柞伯殷



〈令方舞〉銘  
(部分)



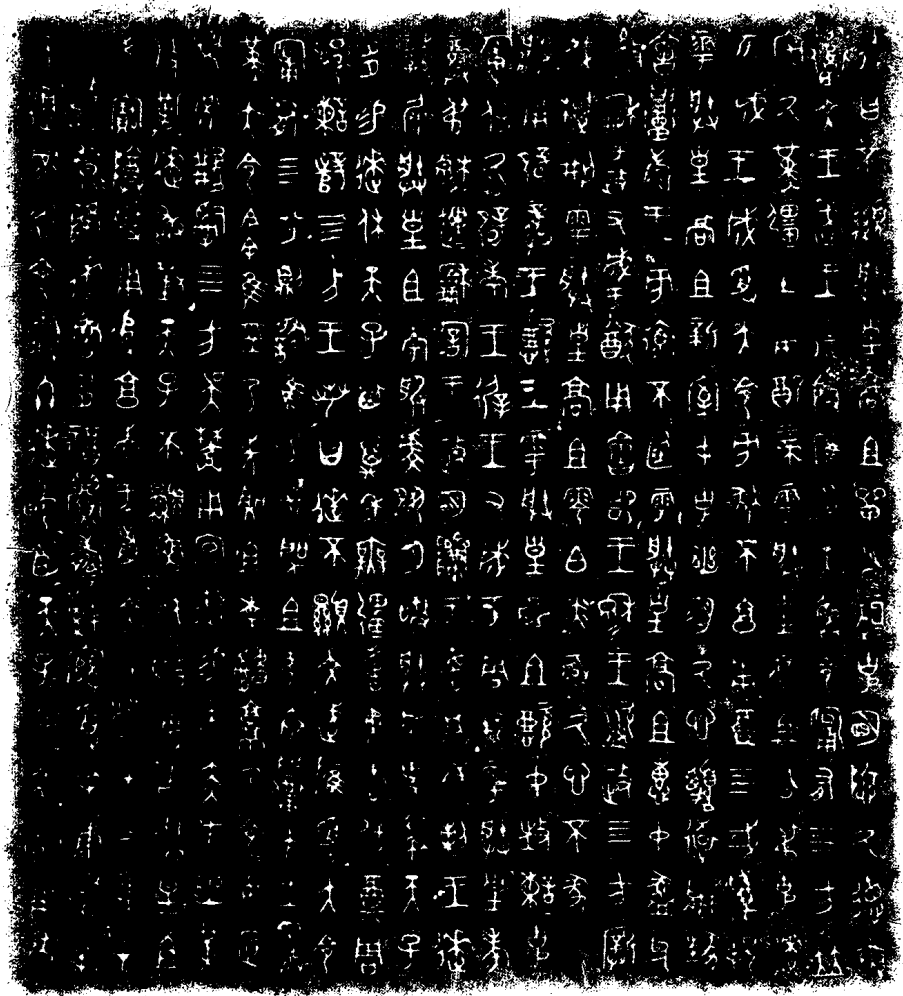
《中国新発見の書》二〇頁

木偏が右側にのっています。そして一番下が「十」、それから六行目の一番上が「再」、それから「弓」、三字目が「無」、その下は通貨の義で「廢」と読むのだそうです。つまり、廢しなし。的に外れた矢はなかった。それで約束どおり、終わりにから二行目の二字目から「赤金十反」とあり、それをもらったこと、楽器などを貰ったことを記念してこれを作った。そういうことなのです。これが作られた時期はいつ頃なのかといえますと、西周時代の前期、昭王期と考えられています。なぜ、昭王期かといえますと、令方彝の書き出しと書式、それからもう一つの特徴は三行目の上から四字目に「父」という字があります。終筆がぼつてりと太くなっています。このような様式が、昭王期の銘文とよく似ているということからです。ここには省略された字もあり、例えば、昭王の「昭」なんかは、点が省略されるとか、もう一つ異体字というのでしょうか。二行目の真ん中、下から五字目に「南」があり、このような南はあまり見かけない。「金」も同じように珍しい。あるいは、最後の行の下から三字目の「宝」という字もずいぶん画が省略されていますが、新出土の金文の銘としては、第一等の出来ではないかと思つてのことから紹介しました。ぜひ一度手習いをしてみてください。では、次へ参ります。

次は図②の速盤について話したいと思います。この器は、西安から電車で二時間ぐらい行ったところに宝鶏というところがあります。ここには、宝鶏博物館というのがありまして、この周辺からは西周時代の青銅器があちらこちらから、大量に出ておりますので、この博物館は青銅器で有名です。そこから出土したのがこの速盤です。盤としては大変珍しく、円形の輪がぶら下がっているのですが、取っ手が四つあり、この耳があるというのが初めての出土例であります。銘文は三百七十二文字あり、高さが三十五cm、幅が三十二cmぐらいの大きさです。盤というもので、一九七六年に出土した墻盤（史墻盤）というものがあり、二百八十四字の銘文は盤の中では最も長文のものです。中心線、横の段をきちんとそろえて、きわめて整った様式に仕上げてあります。書風はですね、趺毀という器と様式的には基本的に変わりません。大体いつ頃のものかといえますと、宣王という時期のもので、西周という国の宣王期、宣王時代というのは、大体の学者の意見がそろいかけていますと、紀元前八二七年から前七八二年までをさします。趺毀もほぼその頃なのですが、より有名なものでは大克鼎という金文で、これもまた、宣王期のもので、なぜ、この速盤を取り上げたかといえますと、図②の下に「文」「武」「成」「康」「昭」「穆」「恭」「懿」「孝」「夷」「厲王」と書いてあるものを並べました。これは、周王朝の名前なのです。周の王朝は十三代続いたと言われることが、司馬遷の『史記』の中に書いてありまして、この表の通りになっています。今読み上げた順番で、それと実証しうるべきものが今までありませんでした。ところがこの速盤には、全部の王様がこの順序ででてくる。例えば、二行目の上から二字目のところに「文王」、「武王」、そして最後から十一行目の下から三字目「厲王」まで記されている。このことからわかるように、この速盤は次の時代に作

② 逯の諸器

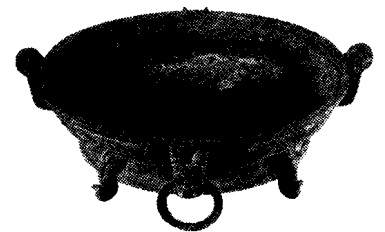
① 〈逯盤〉 銘拓



〈單叔鬲〉 銘全拓



文		邵 (昭)		考 (孝)	
武		穆		徯 (夷)	
成		龔 (恭)		刺 (厲王)	
康		懿			



〈逯盤〉

①の銘文に配列する「西周歴代王諡号」表

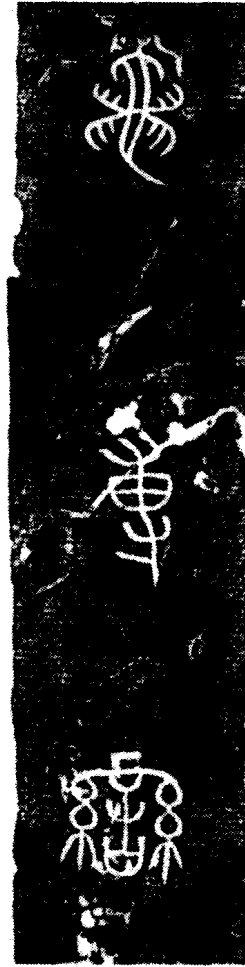
られたことになる訳で、その次の時代は人によってまだ、煮詰まっていなくて、司馬遷の『史記』の記載は紛れもなく正しいということがこの速盤によって実証されたのです。書風に戻りますと、跽殿なんかと似ておりました、硬い腺でややどちらかと言えばお手本かなあという気はしますけれども、宣王期のものとしては、優秀な書とと思います。図②の隣に単叔鬲という小さな壺型の銘文がありますが、こちらの字はやや肉太で、速盤とは少し違ったものですが、これはまた、動きのある、こちらの方が金文としましては上出来かと思えます。上の二字「単叔」は性、名であります。速盤の、「速」は人の名前で、周王が国を興すときに活躍した一人なのです。そういう人の器であるから、すばらしいのだらうと言われているわけであり。もう一つ付け加えますと、先ほどの柞伯殿にしても、この速盤にしましても、こういう整った書体のことを東京大学の松丸道雄先生は、中国書法ガイドの中に金文の書体という項目を設けられまして、宮廷体とその他の体ということを言っておられます。先ほど紹介した跽殿のことを金文の書体の中では宮廷体の代表作だということ論証されているわけ。このことから速盤はもとより出土していませんでしたから、これも宮廷体の一つだということ。これはここで終わりにして図③に参ります。

秦公一号墓石磬、秦公の秦はもちろん始皇帝の秦の国です。戦国時代のある王様、誰か特定はできないので、一応秦公と呼んでいるわけなのです。一号墓は、鳳翔県南指揮村でおよそ十年をかけて発掘されました。このお墓はなんと二百回以上も盗掘に遭っています。発掘は東側と西側から大きな穴を掘ります。残っている深さが百五十メートルもあり、それをこう斜めに掘り起こしているのですが、東側と西側に階段状の道がついています。墓底までその東と西の間隔が三百メートル以上もあります。私は二回行ってきました。墓底には榭室と言う木造の部屋を造るわけです。それぞれの真ん中に墓棺をおくわけですが、王様のお墓ですからね。狙われるわけです。考古学者が調べたところ、さっき言った通り二百回以上盗掘に遭っています。お宝っていうものは殆どありません。ボタンとか、玉のかけらとか出てきた中で一番のお宝が、この石磬なのです。下に模写を入れておきましたけれど、文字通り石で作ってあります。これは平面のところ、ちよつと黒く楕円形の厚みがありますが、これは貫通しています。ここへ紐を通して、ぶら下げるわけです。これを金植状の木で作ったもので叩く。儀式用の打楽器なのです。一番古いものでは殷の時代から出ています。それから非常に有名なものでは、曾侯乙墓といって紀元前四三二三年ぐらいの墓からも石磬が出ています。この側面に文字が彫られているわけ。打楽器ですから音を出すため、音階を変えるために、大小不同であります。大きいものから小さいものへかけて並べるわけです。それを叩いて演奏します。残念ながら完全に残っているものではなく、完全に近いものが二つで、このくらいの状態です。現地で研究者に頼んで分けてもらったわけですが、これがその原拓です。への字形をしていまして、二行書いて

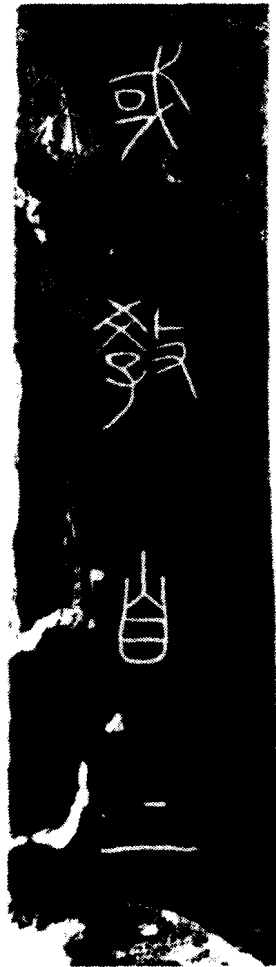
ある。先ほど言いましたように、大小の大きさが異なりますから字粒も異なります。だんだん小さくなっていきますと、二行ではなく一行になります。今、図版を五つ挙げましたが、右側に一行もの、一応原寸幅だけ書いておきました。だから同じものでも一行ですが幅が六・二cmもあるということです。二行ものでも原寸の幅が三・七cmです。左のページがそれです。ご覧のようにこれが一番多い字数でありまして、『中国新発見の書』をお持ちの方は、訂正をしていたいただきたいのですが、十三ページの八行目、「最も長文の二七字」を「三六字」にして下さい。長文のところで三六字、私が今吊り下げたものが全文三六字のものです。これが一番長い。そういう状況なのでありますが、この書風・書体はどうなっていますか。説文解字の親字、つまり小篆体と変わらないじゃないですか。ところが、いつこの楽器が作られたかといえますと、中国の学者の研究の結果、これはもう定説になっていますが、紀元前五七三年になる。これは台湾の学者で、王輝という学者が言っています。左隅に三つ並べました三行、右が今問題にしている秦公一号墓石磬、真ん中が石鼓文、左が秦公簋です。この例から王輝先生は秦公一号墓石磬、紀元前五七三年のこれと、石鼓文とは同時期のものだと言説を出されました。受天、方、虎などが似ていると例を挙げていますが、必ずしも石鼓文と同じ時代ではないのかと言う説を王輝先生の後で出された方もいます。そこで、図の下のマス型に入れたものを見ていただきますと、拓本の部分が秦公一号墓石磬から拾った文字、それから点線の右に籀文を挙げました。説文解字の序文を見ますと、籀文に基づいて小篆というものが作られた。こう記載があるわけです。この籀文とびったりとはいいませんが、ほぼこれだけ合うのです。それから左下に⑦説文と合体というのは小篆と同じだということです。それから⑧をみますと、左側が上という文字、二みたいに見えますが、ここが上だという指事文字ですね。その下が皇の字。説文解字では、皇の字は自分の自という字の下に玉の字を書くのですが、秦公一号墓石磬の文字の方が簡略です。同じように右側の専門の専、それから和の字も説文より簡略です。よって、ここでいいたいことは、秦公一号墓石磬のコピーを中国の人に十数年前に貰ったのですが、そのとき、こんな小篆があるのかと思ったのです。第一印象は小篆でした。それほどよく整っているのですね。石鼓とはまた違うじゃないですか。石鼓というのはやや方形に近いのです。もう少し曲線的要素が多い。ところが、これは、縦長の体をしており、非常にシンメトリックに左右対称になっている。私は『中国新発見の書』に、様式を概ね体を縦長にとり、左右均衡をはかり、点画を一定の太さに揃え、曲直を巧妙に交えた婉麗秀美というべきみごとな書風である、と考えました。秦の始皇帝が全国を統一したのは紀元前二二一年ですね。この秦公一号墓石磬よりも三百数十年後です。書道の小篆に近い規範性がすでに備わっていたのですね。ようするに、書体・書風としてのゆれのようものが、基本とさほど変わらないということです。小篆というものは『書の文化史』に書いたのですが、始皇帝が李斯に言っ小篆を作らせた、小篆こそ公用文字

③ 奉公一号墓石磬

「竈(肇) 專(敷) 絲(蚕)」(原寸幅三・七cm)



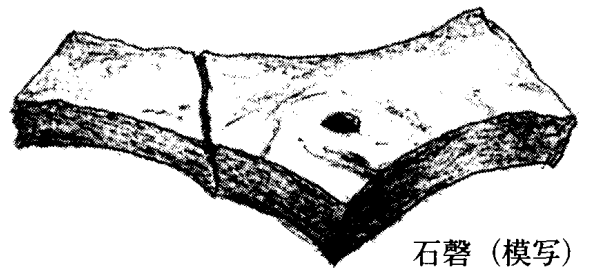
「或教自上」(原寸幅六・二cm)



「屯(純) 魯吉康」(原寸幅三・五cm)



『中国新発見の書』一二頁



石磬 (模写)

上			專		
皇			穌		

⑥ 『説文』より簡略な字列

(右欄が『説文』)

秦公墓	石鼓文	秦公簠

〔中国新発見の書〕一三頁



同



〔籀用無疆／寤(寢) 龔離(雍) 四〕(原寸幅三・七cm)

四		四	
是		是	
商		商	
秦		秦	
啓		啓	

●『説文』の籀文(右)と近似の例

44年		年
帝		帝
教		教
喜		喜
壽		壽

●『説文』と同体例



だということ。母国の文字を多く使用したのだと。ですから説文を見ていきますと、籀文が九十ぐらい、古文というのは六十ぐらいしかありません。ということは、ほとんどの文字が大篆に基づいているということが、この資料によって一つ実証できたということ、私は貴重な資料ではないかと思えます。

次の資料④に参ります。この郭店楚簡というものは、一九九二、三年に湖北省の荊門市の郭店という村で出土したので郭店楚簡というのです。これが出土しまして大変貴重なものだというのは、まず、凶版に挙げました『老子』。『老子』のテキストが三種類出土してきたということです。この前に馬王堆帛書などにも『老子』があったりするのですが、それよりさらに古いということでもまず問題になった。ところが、この墓から出土してきたものは、全部書籍、書物だったのでありまして、十六種類出ております。歴史の学者達が、この郭店楚簡についてたくさん論文を発表なさっています。私がざっと数えたところでも、七十二ぐらいありました。日本、中国を含めて。ところが、今言ったように、内容を問題にしているのでありまして、その書がどうかということについては、そんなにありません。日本の方で新井光風先生を含めて五人の方が発表なさっております。この郭店楚簡につきましては、郭店楚墓竹簡という本が一冊出ております。これは中国で印刷した簡牘関係の本の中では最も鮮明なもので、是非これは手になさったほうがいいと思います。全部で八百四枚です。これが出たのですが、どうやら考古学者が発掘する前に盗掘にあっているようです。それで、これで全部かということが疑問なのです。八百四枚の中で書かれていないものもありまして、字が書いてあるものが七三〇枚。全部に凶版と釈文とが載っております。私が言いたいのは、新井先生もそうですが、この七百数十枚の全部を一人の人が書いたのではない、何人かの手で分けて書いたのだろうと。研究者のいろいろな説がございまして、私も手習いしてみてもみただけですが、五人くらいの手じゃないかと思っております。要するに、研究者の説がいろいろあるということは、皆さん方も食いついて研究できるということなので、一つ皆さんに論文にでもして頂ければと思います。『中国新発見の書』にこのようにまとめてみたのですが、右側の三本「老子」甲本は、曲線を主とし右上がりの結構で、字形を揃えようとはしていない。真ん中の三行、これは、「唐虞之道」という部分ですが、十六種ある中で一番の肥厚体で縦長の結構をとり、懸針部を太めにし、また転折部を丁寧な運筆している。それから左三本を「成之聞之」といいます。「之」は、曲線を多用した大ぶりの字形で、横画は中太り、縦画を細くするなど筆鋒の開閉の差が大きく、闊達さがあります。もう一つ、「語叢」という短い簡がありますが次に移りたいと思います。

次の⑤里耶秦簡は二〇〇二年の六月に出土したばかりです。湖南省のずっと西の果てに土家族、苗族の自治州があります。そこに、戦国期から秦の始皇帝の時期までの遺跡が出てきました。そして深い井戸がありました。一辺が二メートル

④ 郭店楚簡

「老子」甲 (部分)



「唐虞之道」 (部分)



「成之聞之」 (部分)

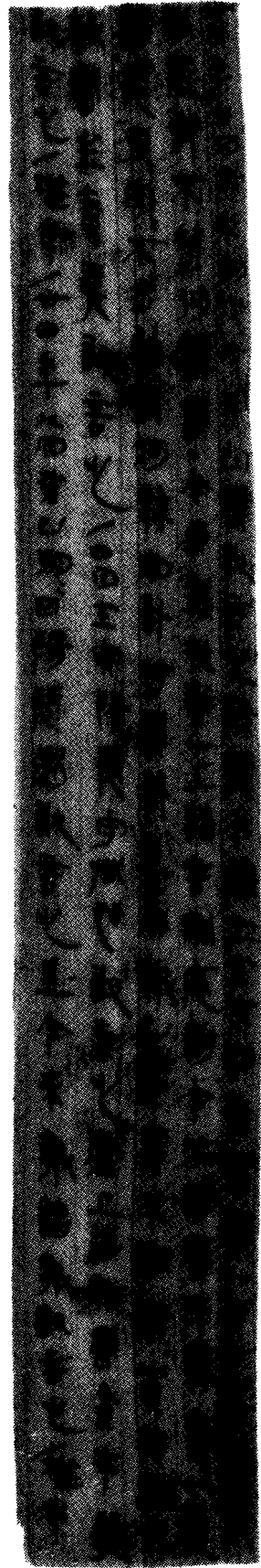


〔中国新発見の書〕四七頁

の四角い井戸で、深さが十四・三メートルあります。そんな深い井戸に十八層もの層があり、下のほうからなんと三万七千点もの簡牘が出てきたのです。その中に一点だけ上のほうの層、第五層目のところに、少量の戦国簡と思われる書風のもの、松丸有希子さんが研究した「九九」を書いたものが一つ出てきたのです。出てきたものは楚、秦簡ですね。これは、中国の『文物』という学術専門誌として常用のもですが、その二〇〇三年の一月号に簡単な報告がされましたが、三万七千点の中からたった六十二点しか掲載されませんでした。しかし、鮮明で非常にきれいなカラー写真です。図⑤の右の簡をご覧ください。正面と書きました。真ん中が背面です。裏表にこんな風に書いてあるのですね。それで、書き出しに三十三年とあったり、最後の行の上から六、七字目に三十四年と次の年が書かれたりしています。それから、最後の行の上から三字目の下に斜線が引いてあって、「堪」そして「手」、「堪手」と書いてある。そして、最後の行の一番下にも「堪手」と書いてある。背面の三行目の下に黒っぽくなっていますが「敬手」と書いてある。この、「堪」とか「敬」というのは人名なのです。サインなんですね。これがサインだということをも文物の研究論文のところで、李学勤という文字学者が書いています。内容はといいますと、当時の秦の先ほど述べた湖南省の最も西のあたり、このあたりを統治しています洞庭郡。その下に陽陵県というのですが、このまず陽陵という県の役人が、県の裁判所へ何々を調査しろという依頼を書いている。それを取り次いだ陽陵県の役人が洞庭郡へ更にこんなことを調べてほしいという、もう一度、報告兼依頼をしている。今度は最後のところにこの陽陵県から洞庭郡へ、まだ返事が来ないがどうしたのだと、このような催促の言葉をかいている。このように説明しています。背面はどうかといいますと、洞庭郡の役人から今度は違った郡、遷陵という郡があるのですが、ここへ通達をしている一種の命令文といえます。ここで言いたいのは、こんなにも書風が違ふということ。あるいは書体も違います。ご承知のように雲夢睡虎地秦簡というものがありまして、それと右側の正面の方が縦長のスタイルで、点画に太細がなく、ある学者は方折体と言っておられます。このような点が共通項です。当時の文書に書く、いわば標準準体、標準体に準ずるといふ書き振りに対しまして、背面は、当時の日常で通行している筆写体で、早書きなのです。正面を「堪」という人が書き、背面は「敬」という人が書いた。書き手が違うからもちろん書風も違います。背面のような右肩下がりの文字は、ほかに湖北省から出ておられます。龍崗秦簡がそうです。なぜこんな風に右肩下がりのかということ、今何人の方があちらこちらで書いておられますが、そういう方々の説を読んでも、もう一息わかりません。それからもう一つ図版の左、どちらかといえば、ベースは秦系文字です。秦系の標準体です。ところが、書きぶりを見ますと、ところどころに戦国楚簡でかかれるような筆法が出てくる。例えば長い横画、はじめに「三十年」と書いてあり、「年」の横棒の下、それから「之」という字、その隣の二行目にも「之」の字がある。このよう

⑤里耶秦簡

正面

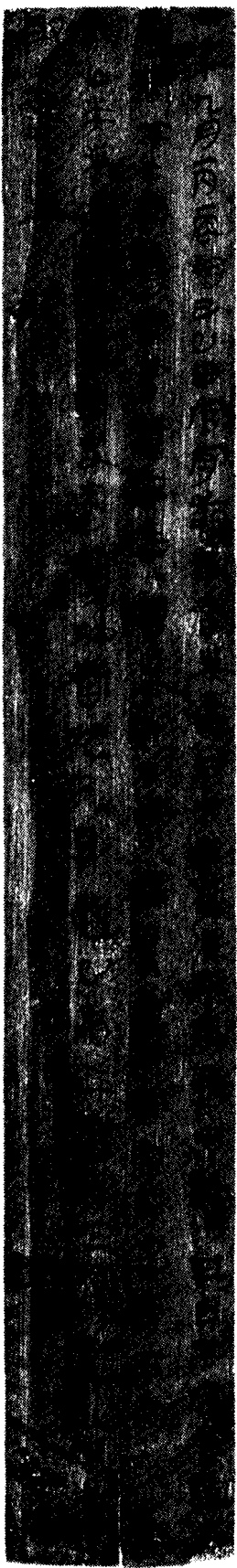


「卅三年三月辛未朔戊戌司空騰敢言之陽陵仁陽士五不狄有賞錢八百卅六不狄戌洞庭郡不智何縣署今為校錢券一上謁言洞庭尉令不狄署所縣責以受陽陵司々空々不名計問何縣官計付署計年為報已皆責不狄家々貧弗能入報署主責發敢言之四月壬寅陽陵守丞恬敢言之寫上謁報署金布發敢言之ノ堪手ノ卅四年八月癸巳朔々日陽陵邀敢言之至今未報謁敢言之ノ堪手」

背面



「卅五年四月己未朔乙丑洞庭段尉騰謂遷陵丞陽陵卒署遷陵以律令從事報之ノ嘉ノ手以洞庭司馬印行事ノ敬手」



な長い横画の書きぶりや、一行目の真ん中にある「言」の二画目の終筆をキュツと左へひっかける方法も楚簡のなかに出ています。ここでいえることは、秦が全国を統一したときに、征服した国々の文化を閉鎖してしまつたわけではないということです。とすれば、この湖南省辺りは、昔は楚の国で、楚の国の書記官が秦の国で書いているのですが、自分が習ってきた、手についた書き癖が出たのではないかと、私は思ったわけです。

では最後の一枚図⑥に入ります。張家山竹簡です。漢墓から出土されまして、お墓に番号がつけられています。二四七号墓といいますが、張家山漢墓竹簡二四七号墓というタイトルで二〇〇一年に刊行されています。これは先ほどの郭店楚簡ほど鮮明ではありませんが、中国の出版物としては非常によく見えるものです。とても多い竹簡で、千二百三十六枚出土しました。これのほとんどが書籍です。書籍でないのが一番はじめにあげた〈曆譜〉というもので、カレンダーみたいなものですから書籍と言えるかどうかはわかりません。まん中あたりに〈遺策〉とありますが、これはお墓に埋葬する副葬品のリストです。よつて、これも書籍ではない。枚数が、〈曆譜〉が十八枚、〈二年律令〉が五二六枚、〈遺策〉は四一枚、それから次の〈奏讞書〉というのですが、これが二二八枚。それから一つ飛んで、〈算術書〉は文字通り数学の書物なのですが、これが一九〇枚。〈蓋廬〉これは五五枚。それから〈引書〉これが二二〇枚。他にもう一つ〈脈書〉というものがあつて、ここには挙げませんでした。六六枚ございます。簡の長さがだいたい三十センチくらいだと思つていただければよいと思います。この二四七号墓から出ました副葬品、これもまた盗掘に遭つていまして、早い時期にお墓が破壊されていましてから、竹簡がもつとあつたようです。けれども残つているのがこれだけなのですが、そのほかに珍しいのは、硯が二面でています。それから筆鞘といまして、〈遺策〉をご覧ください。そこに釈文を載せておいたのですが、「筆一、有管」と書いてあります。つまりこれは、今までの出土例から見ますと、筆をおさめるもので、それを「管」という。それが出ている。残念ながら筆は腐つてしまつたのでしようか、出てきませんでした。内容を見ますと〈二年律令〉というのは、法律のことについて書かれているものです。それから〈算術書〉。これは数学の問題集、或いは比例、面積、体積、その他に出題と回答例なんかもある。それから〈脈書〉というのは、いわゆるツボですね。体のツボ、漢方医のツボ。そのようなことについて書いてあります。ただし、埋葬品から見まして、それほど身分の高い人ではなかつたのだらうというところが、この本の中に書いてあります。さて、この書についてでありますけど、〈奏讞書〉というのが真ん中にあります。これを見ますと、どうでしょうかね、あれに似てない、と思うものがあります。私は銀雀山竹簡にやや書風が近いのではないかと思ひます。或いはまた馬王堆一号墓の〈遺策〉。これにも縦長にビューンと引ききつて太くするというものがありました。そういう書風とよく似ている。言うのを忘れましたが、この竹簡など内容を見まして、書かれた年代は前

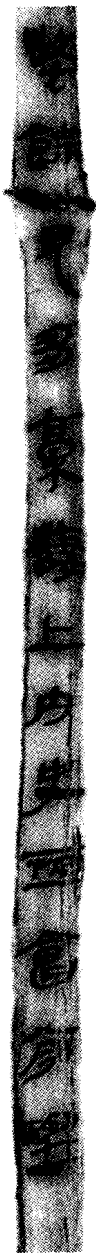
⑥張家山竹簡

〈歷譜〉(長さ二一・七cm。二分割)



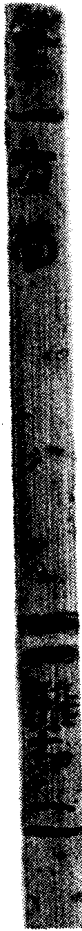
十二年十月癸未、十一月癸丑、十二月壬午、正月壬子、二月辛巳、三月辛亥、四月庚辰、五月庚戌、六月己卯、七月己酉、八月戊寅、九月戊申。

〈二年律令〉(長さ三〇・五cm。二分割)



官各二尺牒疏書、歲馬、牛它物用稟數、餘見芻稟數、上内史、恒会八月望

〈遺策〉(文字部分のみ原寸)



筆一、有管。

□二

〈奏謝書〉



廷尉教等曰、当棄市。有曰有死父、不祠其家三日、子当何論。廷尉教等曰、不当論。有子不聽生

〈奏謝書〉

家國重先君廟祀無一日

嫁罪重、廷尉教等曰

〈算數書〉

乘萬十萬也、千乘萬

乘萬十萬也、千乘萬

〈蓋廬〉

曰、貴而毋義、富而不施者、攻

曰、貴而毋義、富而不施者、攻

〈引書〉

春產、夏長、收秋、冬藏

春產、夏長、收秋、冬藏。

〈同右〉

莫食為千、夜半為千、旬

莫食為千、夜半為千、旬

引書

引書

漢の紀元前一八六年と特定できるのです。もっともこれは全部書物ですから、埋葬されたのは前一八六年だけでも、その人がもし日常使っていたのだとすれば、もうちょっと前に書いたものかもしれませんね。しかも、少なくとも前漢のもっとも早い時期のもので、馬王堆帛書などとはほぼ同時期のものだといわれています。それなのに、次の〈算術書〉と、今の〈奏讞書〉とまた書風が違う。特に私が出したものです。一本の竹簡の部分ですが、二字目、四字目、最後に「萬」という字が出てきます。全部様式を変えていますよね。二字目は点画のところを左にビヨーンと長くする。四字目は、右へはねだす。最後は、スポツとおさまる。こういう変化をもたせた。これは、我々や皆さんが作品作りをするときに、横に同じものが並ぶと、ちよつと書風を変えたりするじゃないですか。ああいうことは、あの楚簡、郭店楚簡から学んだということを実証しているのですけど、その他には馬王堆帛書などにもありますし、こういうところを見られるというのはおもしろい。ところが次の〈蓋廬〉五五枚ある中でこれを見ますと、先ほどの里耶秦簡のような秦系の文字ですよ。里耶秦簡とほとんど同じ構えですよ。線の太細がない、それから線をポキポキと、いわゆる方折体で書いている。そういう点では〈引書〉も書き手が違うように思われます。右下がりの横画が出てきますけれど、書体の根底は共通しています。終わりから二本目の下に「引書」とあるのは、これは表題で、書き出しの簡の裏側か、終わりの簡の裏側にこのような表題を入れているのです。入っていないのが〈遺策〉、〈曆譜〉です。これは表題ですから、たぶんあらたまった気分で書いたのでしょね。よって、後ろから二行目の〈引書〉の構えとはずいぶん違って、どちらかといえば小篆に近い。最後の〈引書〉を見てください。これはいかがでしょう。上から四字目の「千」、下から二字目の「千」という字には、いわゆる八分の書法が見えます。睡虎地秦簡の中にも八分的要素のものがあります。要するに八分体の様式としては確立していませんが、このように使われているわけです。同じ書籍の中に異なった書風が登場するということは、書き手が違うということですですね。これは一人が二つに書き分けたとは思えません。たぶん分担して書いたのだと思います。まあそんなところですね。近頃はこのようなおもしろい資料が出てきました、研究には事欠かない時代になってきたと思いますので、あなた方も広く目配りなさって勉強して頂きたいなと思います。話は以上です。ありがとうございました。

(文責 河内利治)